

旧石器遺物集中部と縄紋竪穴覆土出土遺物 の違いを述べよ ー 日本旧石器研究の論点 ー

2026年 7月 26日（日）

第4回 COLS考古学フォーラム

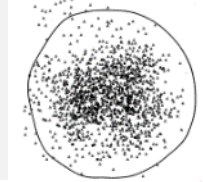
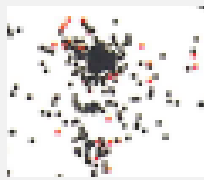
明治大学グローバルフロント 402I教室

五十嵐 彰

前半：集中部の成因(月見野仮説批判)

ハーフタイム：吸い殻集中部

後半：母岩識別問題(砂川仮説批判)



問題：旧石器遺物集中部 と縄紋竪穴覆土出土遺物の
違いを述べよ

答え ①：旧石器遺物集中部は使用痕跡遺構、
縄紋竪穴は製作痕跡遺構である

① 遺構の種類

製作痕跡遺構



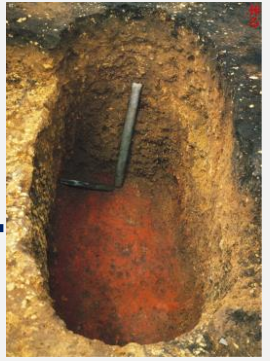
使用痕跡遺構

空間確保遺構

埋設遺構

採掘遺構

廃棄遺構



* 五十嵐2006「遺構論、そして考古時間論」参照

1. 空間確保遺構

M – U – D



2. 埋設遺構

M – U ...



3. 採掘遺構

(M ▪ U) – D



4. 廃棄遺構

M – U ...



5. 使用遺構

U – D

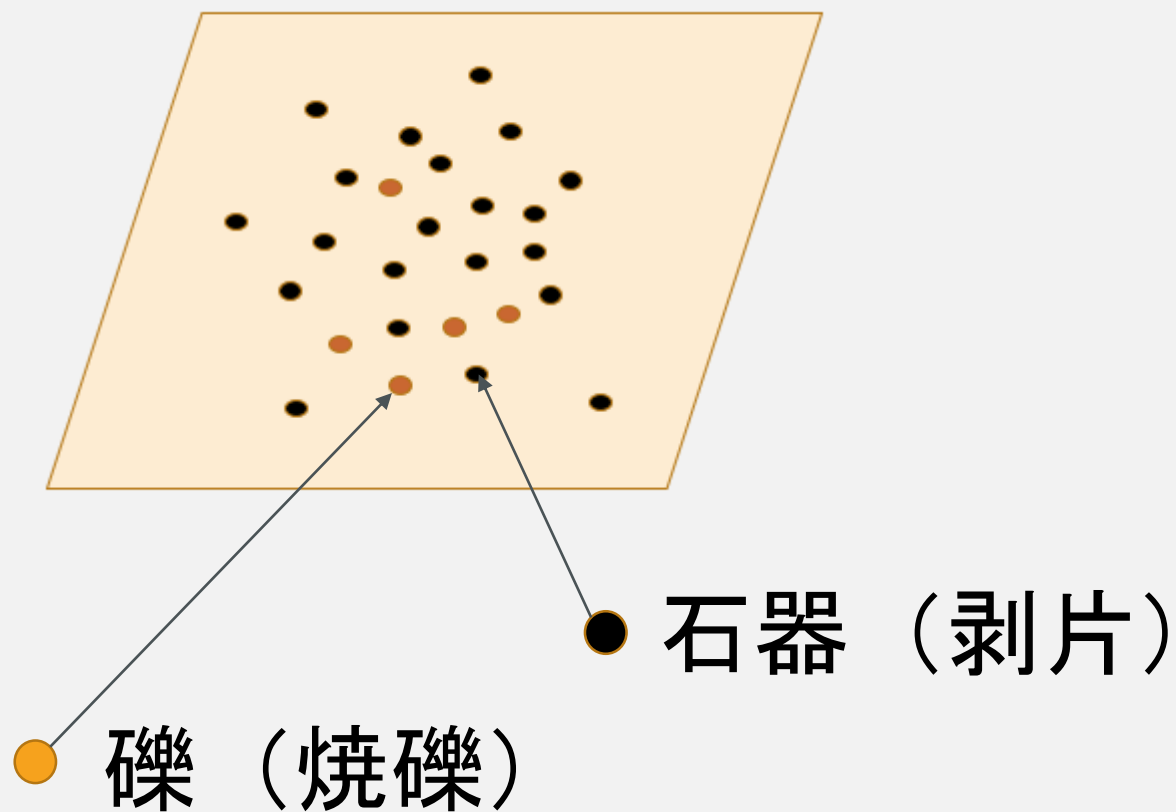


* 埋没 (土壌の流入) がどこに位置するか

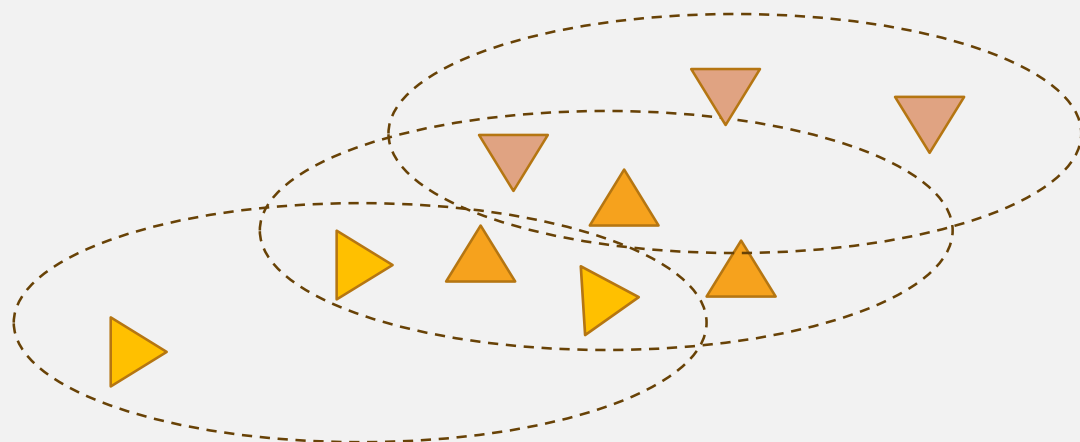
* 定形性の度合いは何に規定されるのか

<場> : (製作) → 使用 → (廃棄)

<もの> :

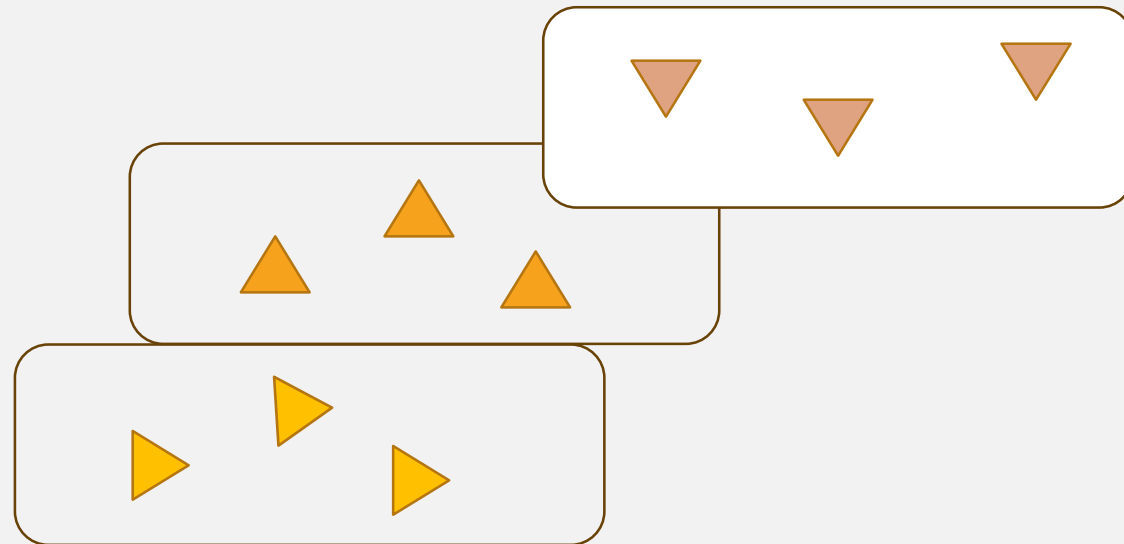


層位と個物の関係



点の集合体としての共存資料

⇒ 自然層：重複



面で画された共存資料

⇒ 人為層：累重・切り合い

* 五十嵐2025 「型式・層位・個物の関係性」 『貝塚』 第80号、第2図：15頁

問題：旧石器遺物集中部と縄紋竪穴覆土出土遺物の違いを述べよ

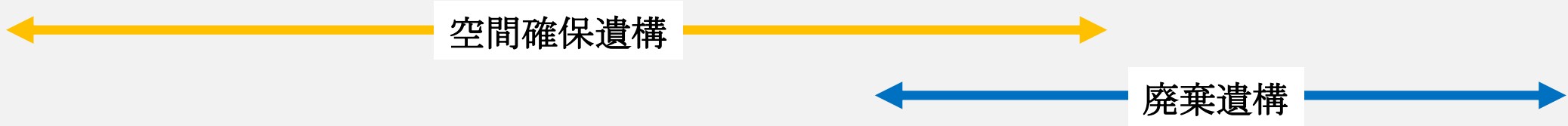
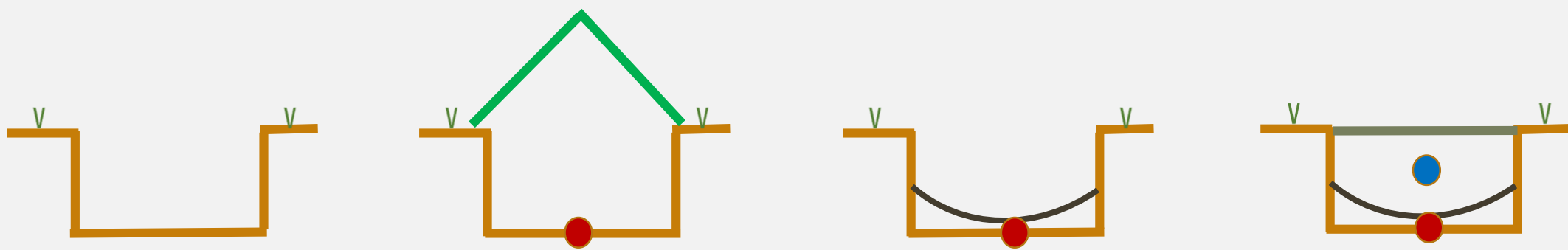
答え ①：旧石器遺物集中部は使用痕跡遺構、縄紋竪穴は製作痕跡遺構である

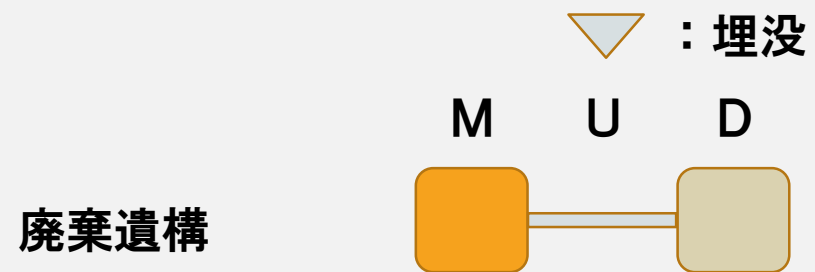
②：竪穴覆土出土遺物は空間確保遺構が転用された廃棄遺構の遺物である

② 遺構の転用

縄紋縦穴の場合

製作 → 使用 → 廃棄 → 転用





問題：旧石器遺物集中部と縄紋竪穴覆土出土遺物の違いを述べよ

答え

①：旧石器遺物集中部は使用痕跡遺構、縄紋竪穴は製作痕跡遺構である

②：竪穴覆土出土遺物は空間確保遺構が転用された廃棄遺構の遺物である

③：遺物集中部の成因は未定だが、環状遺物集中部は遺棄による集落とされている

③ 廃棄の様相

遺棄 ⇒ 一次廃棄：MD(製作-廃棄)

primary refuse



廃棄 ⇒ 二次廃棄：MTD(製作-運搬-廃棄)

secondary refuse

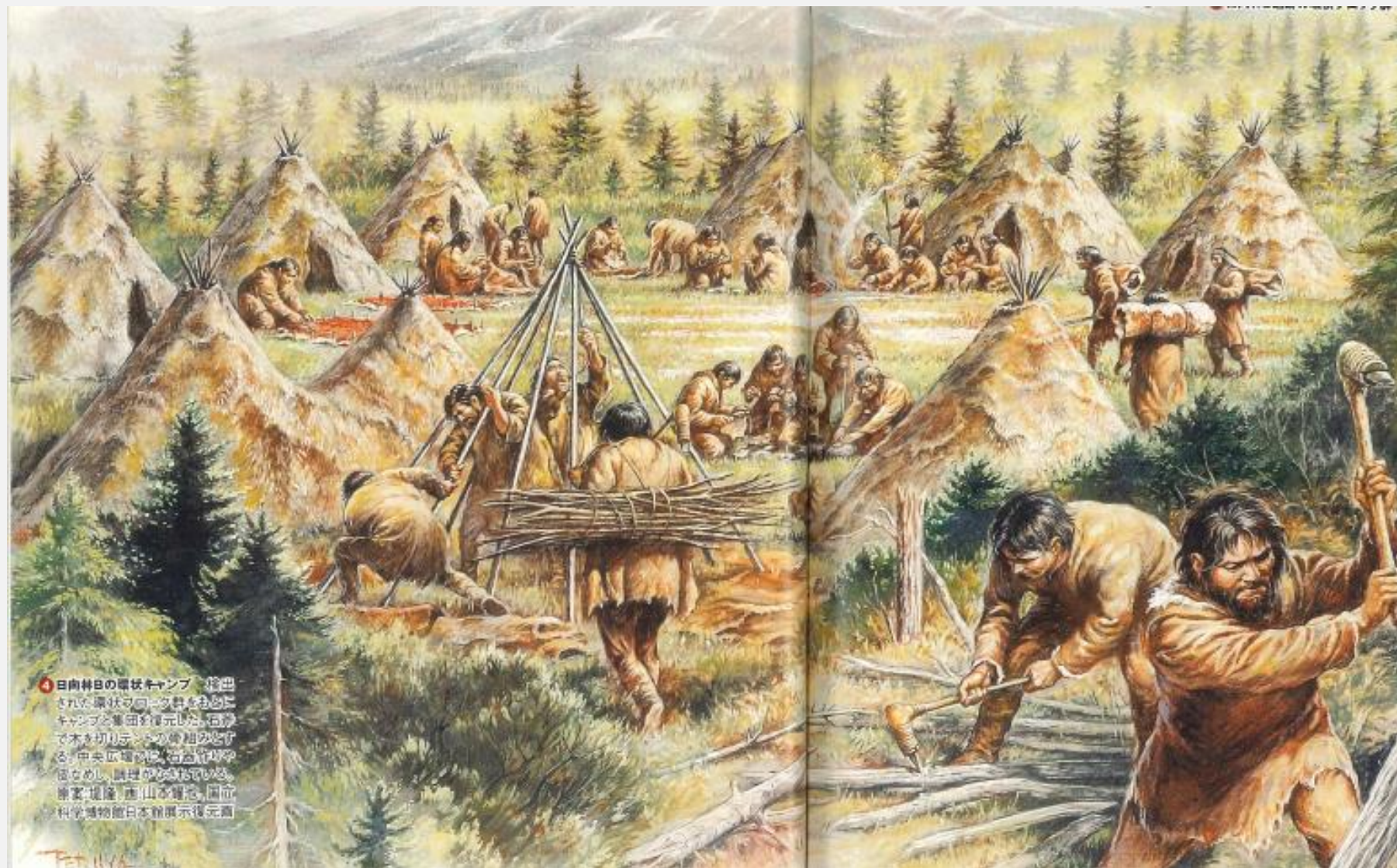


小菅2006『赤城山麓の三万年前のムラ』
新泉社



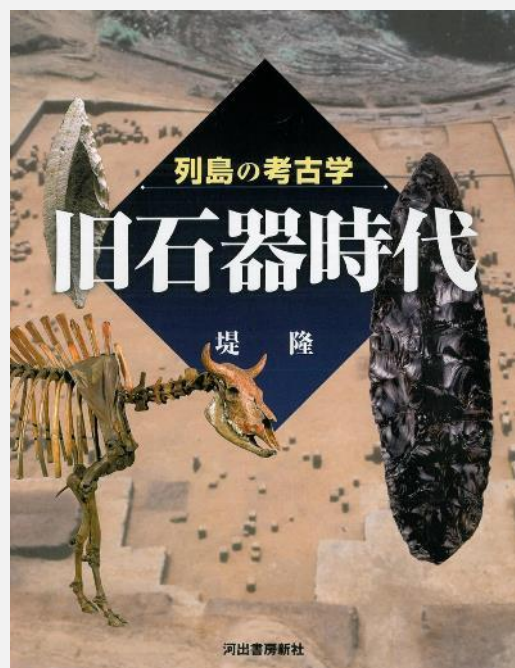
右上：下触牛伏ムラの復元想定図:45頁

右下：環状のムラ(池花南遺跡)の
復元想定図:69頁



堤2009『ビジュアル版
旧石器時代ガイドブック』
新泉社：54-55頁

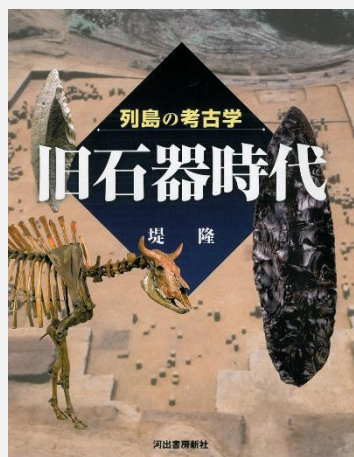
後期旧石器時代初頭の遺跡からは、“環状ブロック群”という円形の石器分布が、石斧や台形様石器をともなしてしばしば発掘される。この環状の石器分布は、集団が大きな円陣を組んでキャンプを設けていたことを物語っている。当時の行動戦略や社会組織をさぐる重要なカギが、このサークルの中に隠されている。



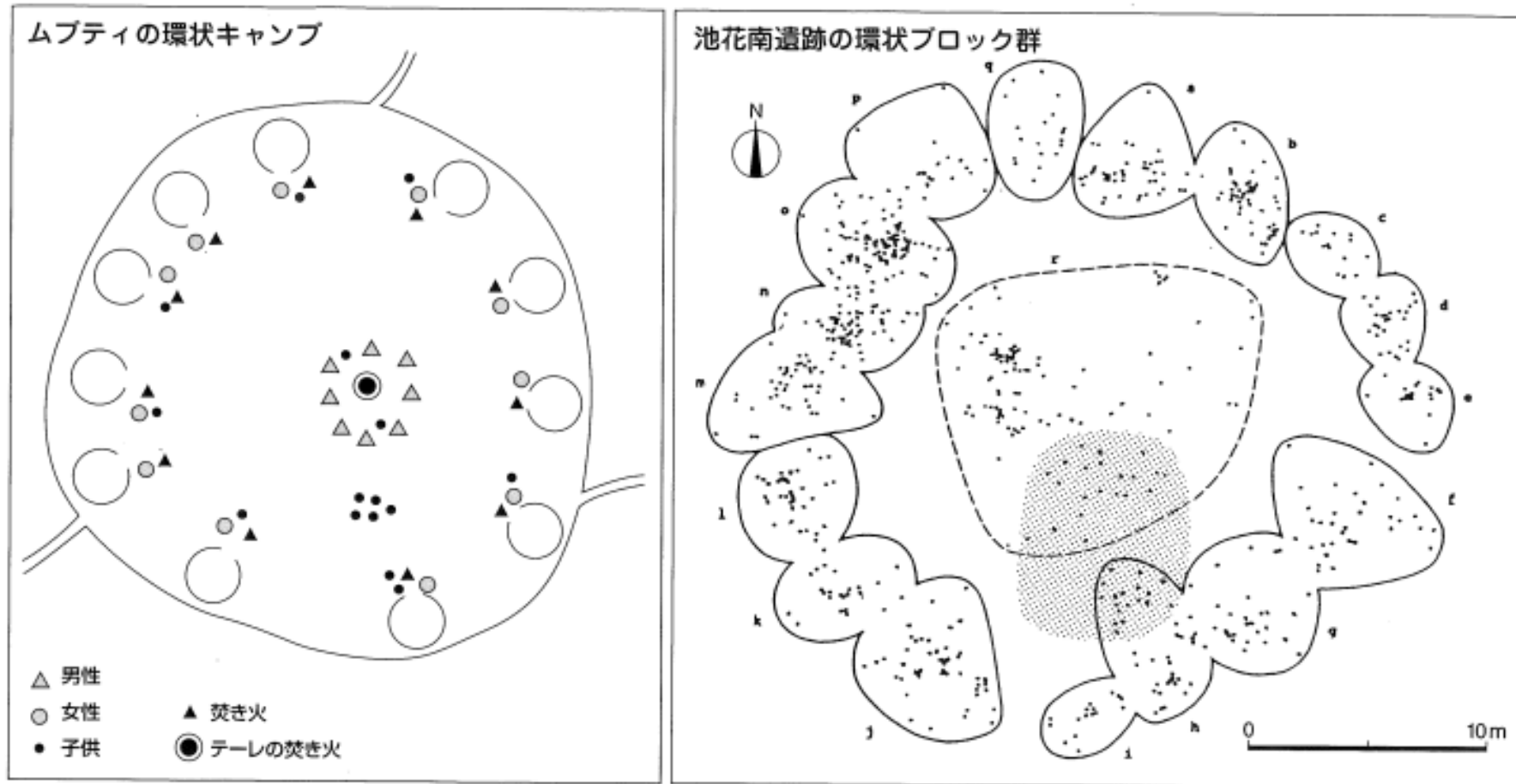
堤2011『列島の考古学 旧石器時代』
河出書房新社：105頁

上林遺跡の環状集落復元図 長径80mという大きな環状のキャンプサイトも、復元画を描くと意外にあっさりした感がある。堅牢な竪穴住居でなく皮張りのテントだからだろうか。居住集団は、50～100人ほどの人々であったと推定されている。10家族以上が集ったのだらう。佐野市教育委員会提供





堤2011
『列島の考古学 旧石器時代』
河出書房新社：94頁



サークルをなす狩猟採集民の社会集団 左は、ムブティ・ピグミーの環状のキャンプ。人類学者の市川光雄によると、ムブティの環状キャンプでは、中央にはテーレの焚き火というのがあるという。公共の場であり、男性の場でもあるという。住居が環状にめぐる周縁部は、女性の場でもありプライベートな空間であるという。右は、千葉県池花南遺跡の後期旧石器時代初頭の環状の石器分布。池花南遺跡においても、かつてはムブティの環状のキャンプのように中央広場を取り囲んで、住居が立ち並んでいたのだろう。いったい何世帯のどのようなメンバーが社会集団を構成していたのだろうか。左：市川光雄1982より作図、右：岩宿文化資料館1992より作図

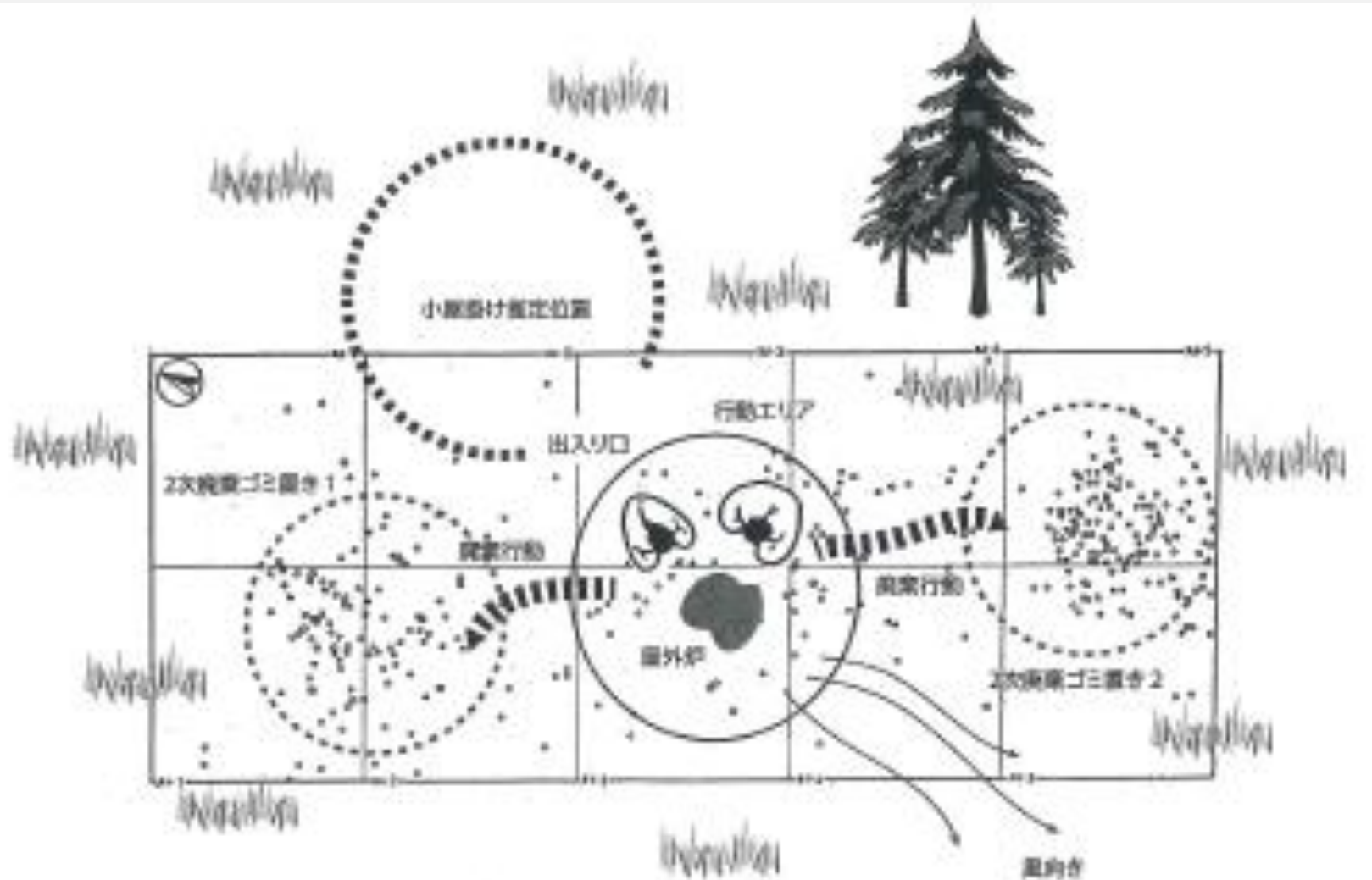


図 22 埼玉県砂川遺跡 A 地点のキャンプ・レイアウト 1 世帯居住で、北からの季節風を想定した場合であるが、行動エリアと置きゴミの位置は調査結果にもとづいている。(戸沢原図改変)

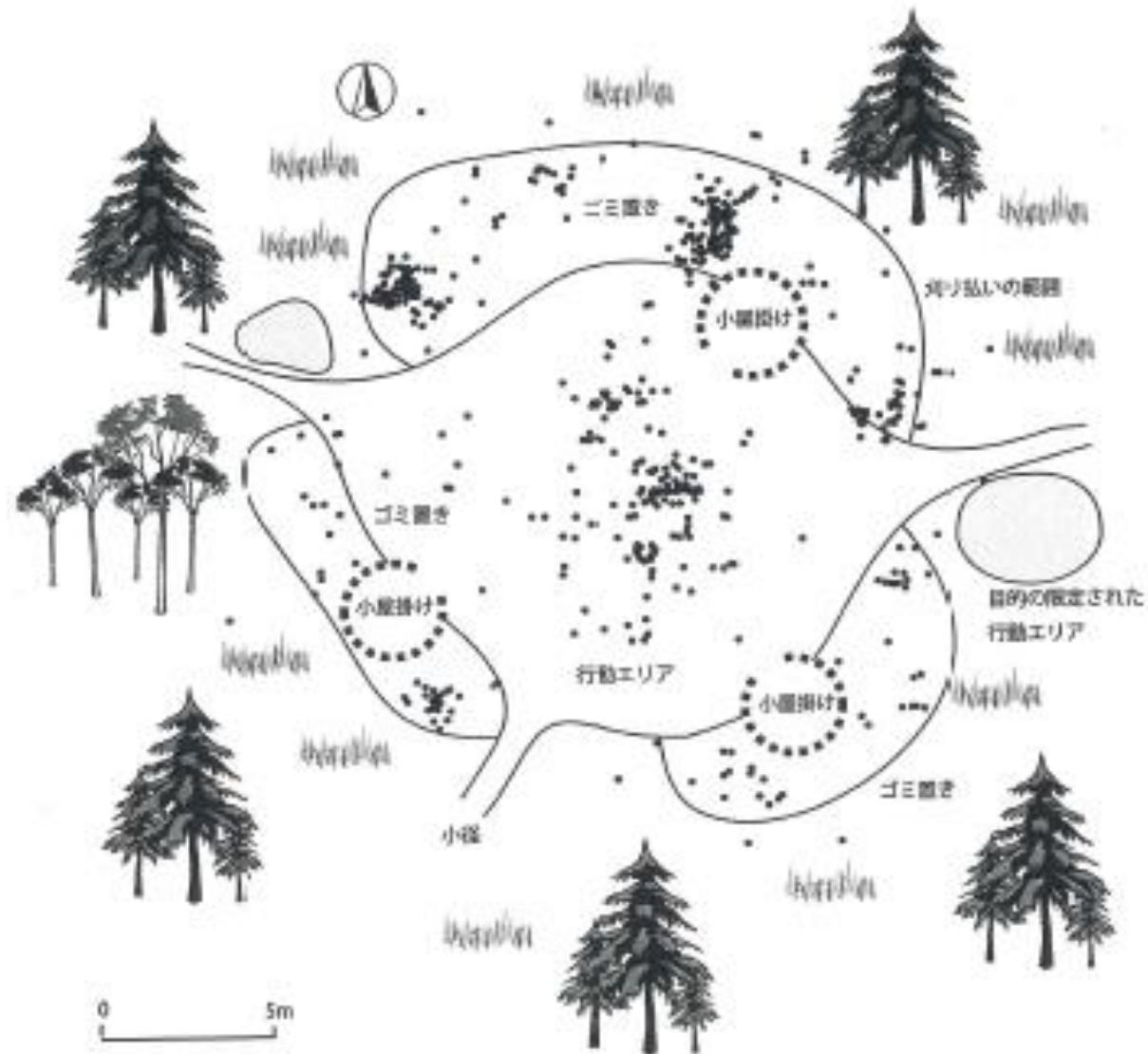
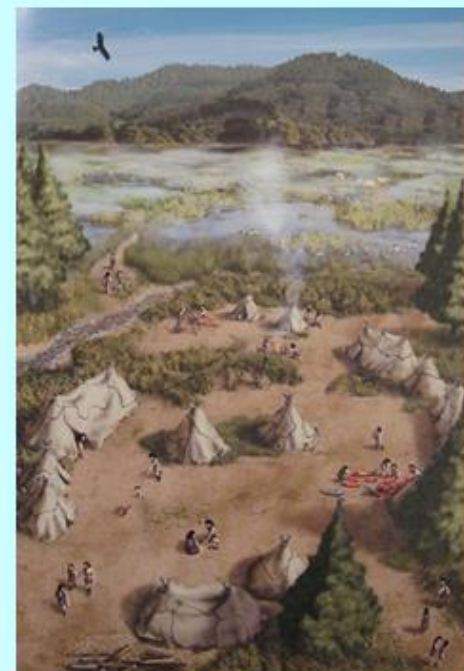


図 23 千葉県御山遺跡第2ブロックのキャンプ・レイアウト 仮に3世帯居住の場合を想定した。
小屋掛け（テント）の位置および目的の限定された行動エリアについても根拠がない想像である。
また、必ずしも3世帯同時居住は想定していない。（矢本原図改変）

当時は一定の範囲を旅から旅の移動生活で、ひとところに一か月以上留まることはありません。しかしある程度の計画性を持っていないと、石材や動物を獲りそびれるため、移動の領域は一定に固定されていたと考えられます。その中で後期旧石器前半期の約3万年前頃には環状ブロック群という遺構があります。栃木県上林遺跡例で直径60mくらい。直径2～3mの石器集中部（ブロック）が十数基、環状に広がって分布しています。中央にブロックがあるものと無いものがあります。北は秋田県あたりから、東海、長野県あたりまで確認されている。石器がブロック間でひんぱんに接合する状況から、円形の集落を一時的に作って集まり、道具のやりとりや、集会のようなものをしたらしい。しかしいつもこうだったわけではなく、普段は分れて暮らしている小集団が、一時的に集合することがあったらしい。その理由ですが、たまには同部族で結束したり、交流もしたくなるのかも。あるいは集団見合いの場なのかもしれません。同部族が一定の領域を共有し、タイミングを合わせて交流するようなスケジュールが組み込まれている。そんな社会であったと考えられます。（長崎）



図：環状ブロック復元図 上林遺跡（栃木県）

提供：佐野市教育委員会

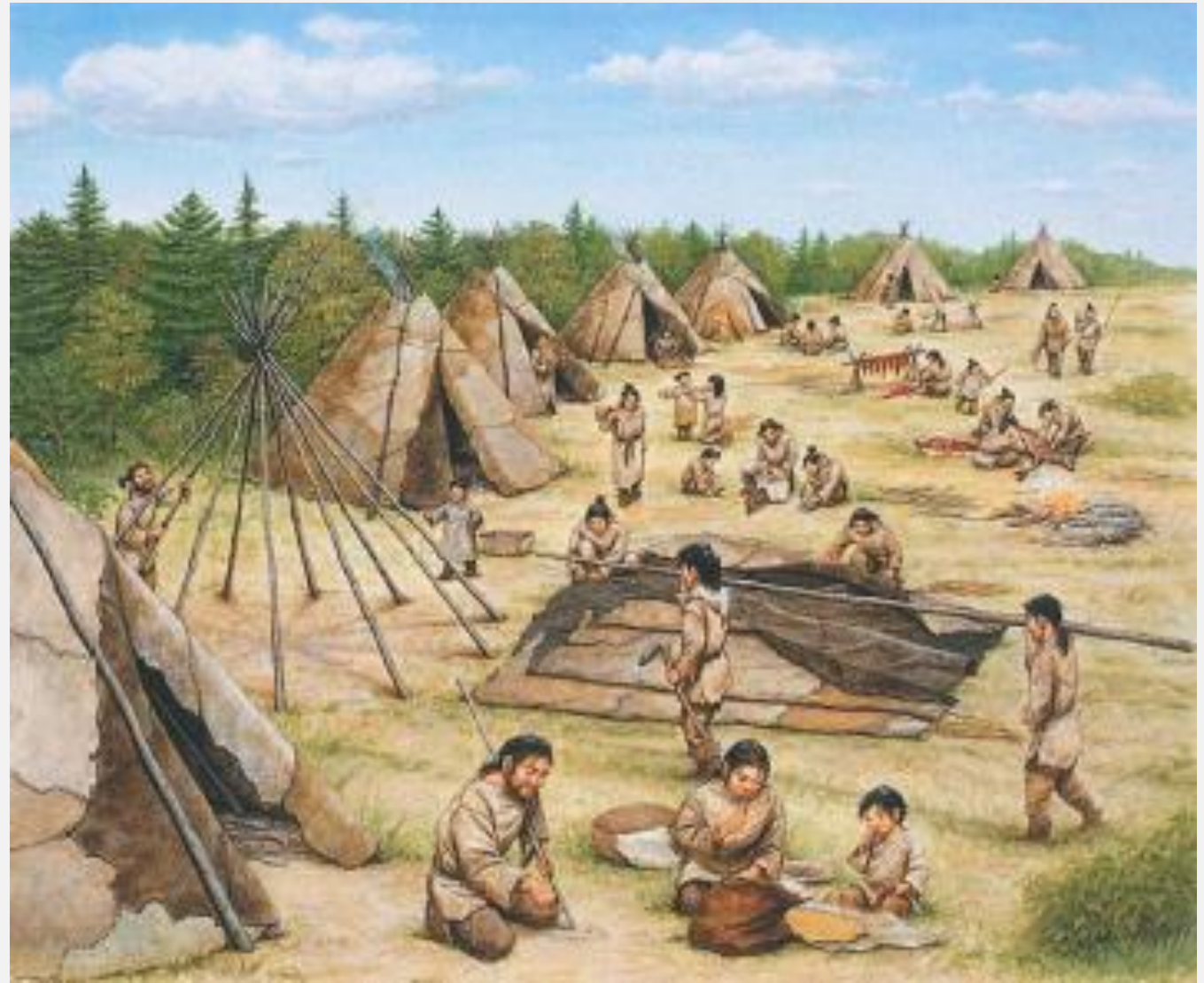
2004 佐野市埋蔵文化財調査報告第30集

『上林遺跡 佐野新都市開発整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業』より

http://www.mitaka-iseki.jp/kikaku4/taiketu_01.htm

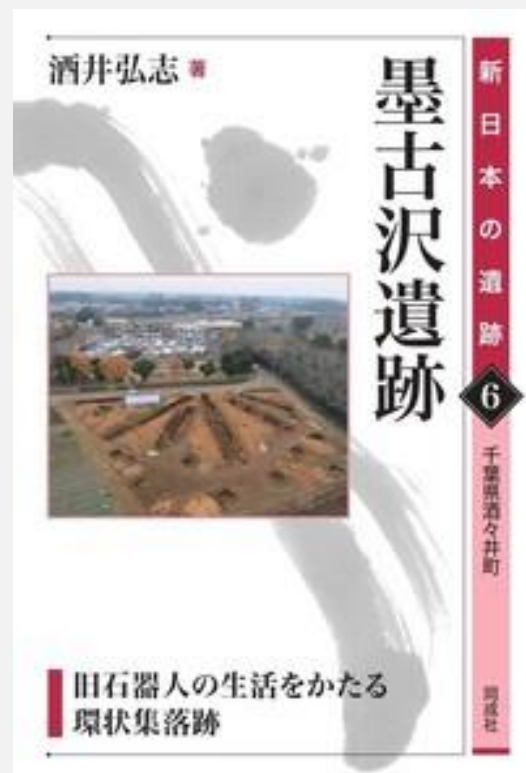


佐藤 宏之2019『旧石器時代』
敬文社：77頁



国立歴史民俗博物館 常設展 先史・古代展示パネル

工藤 雄一郎 編 2022：78-79頁



酒井2025『墨古沢遺跡』
同成社：102頁

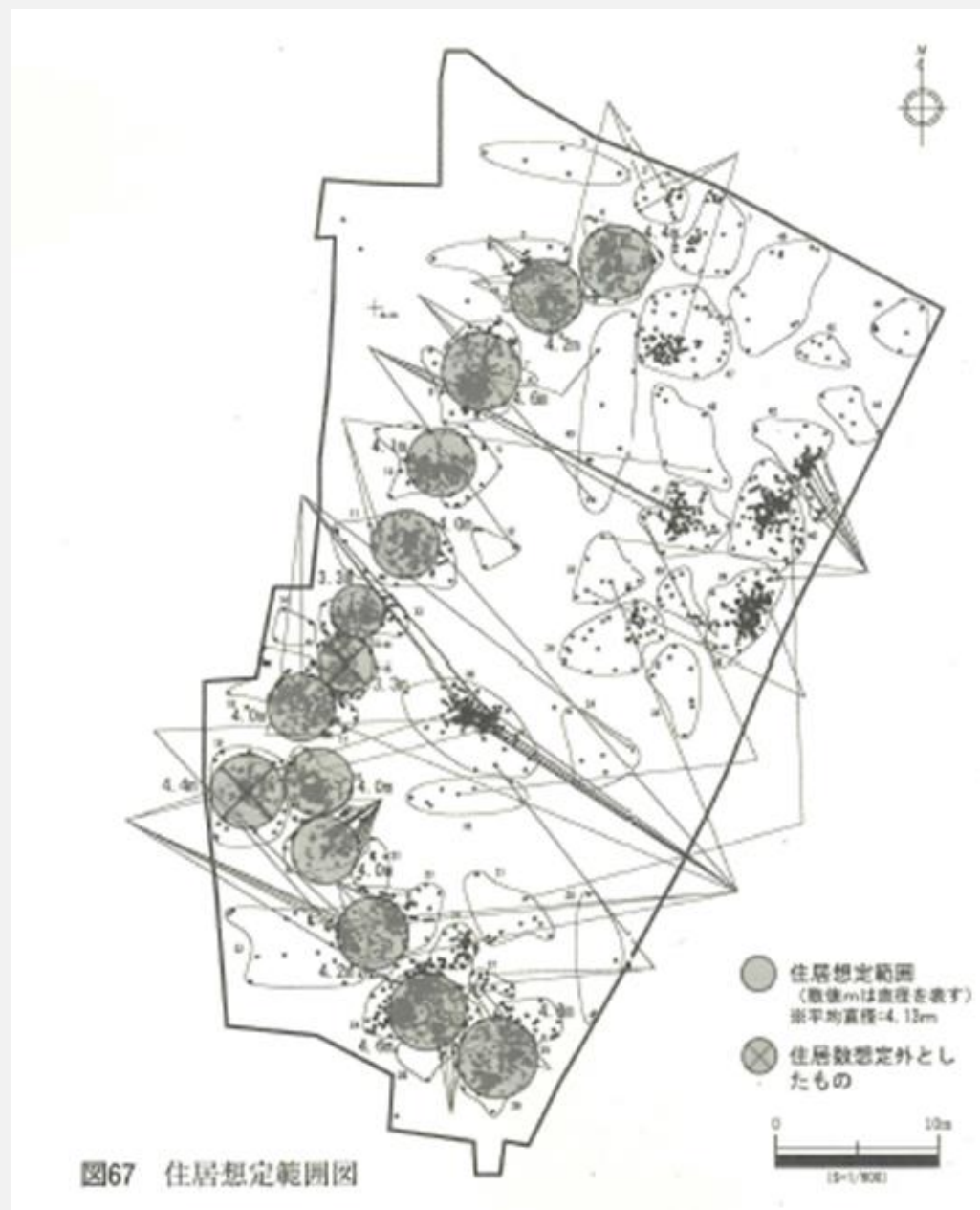
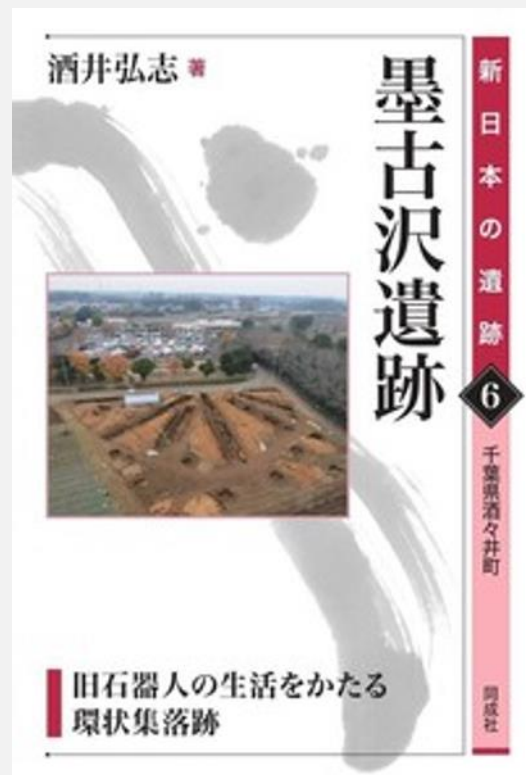


図67 住居想定範囲図



酒井2025『墨古沢遺跡』
同成社：8頁



整備イメージ鳥瞰図



酒々井町ホームページ 2024年10月11日公開「墨古沢遺跡」



【墨古沢遺跡の環状ブロック群イメージ復元】



しすいまち
酒々井町 Shisui Town





問題：ある特定の場所に、たばこの吸い殻だけがまとまって捨てられているのに気が付きました。

しばらくすると、きれいに片付けられています、
またしばらくすると、同じ場所に同じように吸い殻だけが
まとまって捨てられています。

さて、この吸い殻は、なぜ、どのようにして、ここにこのような
「集中部」を形成しているのでしょうか？



井の頭公園



● 吸い殻集中部

吸い殻集中部の形成要因

人為によるのか？ それとも自然要因なのか？

- 1：清掃人掃き溜め説
- 2：喫煙者投棄説（灰皿廃棄説）
- 3：つむじ風吹き寄せ説
- 4：小動物寄せ集め説





© 2013 Toshio Sogameya

石器文化研究 4

記録・論評・回答集

シンポジウム

AT降灰以前の石器文化

—関東地方における変遷と列島内対比—

1992

石器文化研究会

ment

を対比しようとするならば、それが形成される上限である旧地表面を抽出して、これによって対比しなければならないが、そのもとである火山灰が細かいことから時間が経つにつれて順化するようになってしまい、旧地表面の識別が困難なのが現状であり、正確な対比をめざすならば、黒色帯を使ってするのは避けた方がいいと思う。同じようなまちがいをとして、下輪台地ではたまた「新期テフラ」という言葉が聞かれる。比較的厚いⅠ～Ⅱ層中に赤褐色の層が見られ、これをさしているらしい。しかしこれは火山により近い相模原、武蔵野、北関東では見られず、基本的な火山灰堆積(学)を無視した結果でもある。

以上、ナイフ形石器文化研究において、層位の対比・同定では特に地理・地質学上の基本的な所を再認識しておかねばならない。シンポジウムにおける早田氏の発言には、そういう意味で同意する。

関東地方における石器文化の変遷に対する感想 五十嵐 彰

「AT降灰以前の石器文化」と題したシンポジウムに関して、ATの直上より出土した石器群を整理している担当者として若干の感想を述べる。

慶応義塾横浜校地内遺跡については、相模野台地における変遷を述べる中で、段階Ⅳ(VI層段階)に含まれるとされ、段階Ⅴ(V・IV下層段階)にかけての過渡期の石器群であるとの評価がなされている。その理由としては、段階Ⅳ的(縦長)剥片剥離技術とナイフ形石器の形態をより重視しており、段階Ⅴに属するとされる円形擲器の共伴、および段階Ⅳ(VI層段階)で多用される信州産黒曜石ではなく、箱根産黒曜石を用いている点については新しい要素として捉えられている。

「段階Ⅳ内に存在する遺跡の多様な石器組成から最大公約数の石器組成を仮構して「段階Ⅳの組成」と見なす方法は、経緯であ」とするならば、当然の結論であろう(佐藤 P.131)。特に、調整加工による変形度が大い円形擲器に関しては、ナイフ形石器のように素材剥片の形状に左右されることが少なく、遺跡でなされ

た活動の種類による廃棄のなされ方、廃棄される遺物の形態などが遺跡によって大きく異なることは、容易に推測される。

残された問題としては、VI層段階に多く見られた信州系黒曜石から箱根系黒曜石への移行についてである。ひとつには、同じ黒曜石でも箱根系黒曜石については、相模野台地では地地域と異なる状況にあるということである。相模野台地における箱根系黒曜石は、信州系黒曜石に比べ獲得にいたるアプローチがより容易な準遠隔地石材として、北関東地方における高尾山系黒曜石と共にその地域における出現パターンを詳細に検討して行く必要がある。

いまひとつは、慶応義塾横浜校地内遺跡において、遺跡内での消費活動が想定される箱根系黒曜石と共に、遺跡外からの搬入と思われる非黒曜石製の大形石刀や信州系黒曜石の剥片が少数ながら混在しているということである。このことは、寺尾遺跡第Ⅶ文化層における第1ブロックと第2～5ブロックの関係に相当しよう。相模野台地におけるVI層段階からV・IV下層段階にかけては、田村隆氏による「推移構造」が、石刃生産と横打剥片生産という石器生産システムを背景に、黒曜石という石材に特徴的に現われる産物形態を示しているのではないだろうか?すなわち、ある石材の集中的な遺構内消費とそれ以外の石材の遺跡内への持込みという構造である。そして、その石材は、石質の違いに止まらず、産地の違いをも反映していると思われる。上土層遺跡など慶応義塾横浜校地内遺跡の相対する極に位置すると思われる遺跡との対比が望まれる。

余談となるが、現在の石器研究においては石器遺物の平面分布を分析する際に「個体別資料分析」という旧石器時代研究に独自の研究戦略を現在、我々は共有している(栗島 P.232)。しかし上述の該期石器群では、個体を識別する際に手掛かりとなる肉眼的な特徴に欠ける黒曜石が主体を占めるがために、「個体別資料分析」の適用が著しく困難である。例えば寺尾遺跡第Ⅶ文化層においては、1829点の黒曜石資料に対して個体別資料に基づいた検討が完全に行えないものは、わずかに163点(9%)に過ぎない。

「個体別資料分析」は、1968年の砂川遺跡の分析を実践的な嚆矢とするが、その方法論は、日本の遺長類学が用いてきた「サルの個体識別」と同様のものである。河合雅雄氏によれば、遺長類学においても、「個体識別」といった方法論は日本独自のもので、その理由として研究者の右脳優位による文化や価値観の相違にま

で言及して述べられている。

石器研究においても、「個体別資料分析」の有効性と限界について、明確な研究戦略上の位置付けを与える必要性があるように思える。

以上与えられたテーマから大きく逸脱しながら、若干の感想を述べてきた。関東地方に限定すればナイフ形石器文化の時間軸上の序列は、ほぼ押さえられてきたようである。残された課題は、地域的な特性の把握と地域間の対比、不十分な調査深度や調査区域による資料の歪みの是正、石器群を比較する際の資料の抽出方法の改善などに求められるであろう。

コメント

岩崎泰一

AT降下以前の石器群が目玉され、久しい年月が過ぎた。その間、分析研究も進み、従来の考え方を根本から問う重要な指摘も相次いでいる。

これまで多少なりとも当該資料に接してきて感じるのは、台形様石器群と総じて一群は、剥片剥離と調整加工の2点で結び付く存在で、いわゆるほど形面的な齊一性に乏しいわけでもなく、また、多様な剥離と表現して終るわけにはいかないほど、体系的・組織的に剥片剥離が展開している、ということである。台形様石器群は折断手法を駆使して石器製作が展開するため、ある意味では目的剥片の抽出が難しい。一方、台形様石器群を構成するベン先形のナイフに典型的な、石器(剥片)の先端に剥離段階から突頭部を取り込む点や、台形状が切出状を呈す石器が剥片端部に板状石核に特有な平坦部分を取り込む現象は、目的剥片の存在をよく示している。上記剥片を剥離したのが厚い板状石核で、板状石核を量的に確保するため、大形剥片の作出を目的に原石の剥離が展開していた、と想定している。資料を観視して感じるのは多様な剥離手法が混在する点で多様な剥離からなる見解が生じる余地を残している。しかし、先に述べた石器と剥片の関係を重視するならば、石核形状に即して剥離が展開している点に気づく。石核からみただけでは、目的剥片の抽出は困難だが、背面構成を重視した剥離こそ、多様な形状からなる石核が残存する理由と見られ、台形様石器群と一括する全体が剥片剥離と調整加工の2点に於いて強く結び付いている、と判断されよう。以上は、これまで感じていた一応の認識だが、台形様石器群には形面的な

静岡県考古学会シンポジウムIX

愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年

収録集

静岡県考古学会
シンポジウム実行委員会

愛鷹・箱根シンポジウムの研究史的意義

池谷 哲之

シンポジウム開催決定まで

シンポジウムのテーマ選定に至る過程については、静岡県考古学会のこの数年の活動を振り返るところから始めなければならない。本会の活動は伊場遺跡の保存活動を発展的に継承することから開始されている。1969年の発足であるから、既に30年近くの歴史をもつことになる。1978年からはシンポジウムの実行委員の一人でもある瀬川裕市郎氏宅に事務局が置かれ、以降、瀬川氏が長くその実務を担当することになる。瀬川氏が東部の考古学界の指導的役割を果たしてきたことは、ここで改めて筆者が紹介するまでもないことであるが、特にこの数年は後進の育成と静岡県考古学界の活性化に意を砕いてきたように見受けられた。1991年に事務局を「若手」に譲ったこともその一つであろう。しかし、氏の意に反して、これをきっかけとして県考古学会の活動は停止状態となった。活動再開の声を最初に上げたのも瀬川氏であったが、再開に当たって活動を盛り上げるために県の東・中・西部で月例の勉強会が企画された。また中断していたシンポジウムは、東・中・西部の例会を母胎として、年一回持ち回りで開催することになった。1994年には再開第1回のシンポジウム「古墳時代の集落」が開かれ、1995年には東部例会が担当してシンポジウムを行うことになった。

当時東部の例会の担当であった筆者は、当然のようにシンポジウムの立案について責任を負う立場にあったが、多量の資料を抱えた旧石器時代の編年以外には、正直なところ浮かぶテーマがなかった。

しかし実はシンポジウムの順番という消極的な理由だけでなく、旧石器時代編年の必要性を強く意識させるきっかけは別にもあった。1990年3月10日に石器文化研究会の月例研究会が沼津市においてもたれ、高尾好之氏と筆者はこれまでの沼津市内の調査で出土したAⅢ以下の石器群にを層位別に並べて、一行を迎えた。市内の石器群が体系的に他地域の研究者の目に触れたのは、実はこれがほとんど初めての機会であった。その資料の大半は未報告であったこと、また沼津市の報告書が必ずしも十分に引き渡っていないこともあって、当日集まった研究者の反応は資料の充実度に驚き、体系的な地域編年案の提示を強く求めるものであった。

「これではいけない。」縄文の研究者である筆者でさえも多少の危機感は覚えた。この資料公開を契機として、「愛鷹・箱根の旧石器を語る会」が私的に結成され、その月例会は6回を数えた。この会は県考古学会の東部例会に発展的に受け継がれていくことになるが、この会のメンバーが今回のシンポジウムの実行委員の主要なメンバーとなったのである。

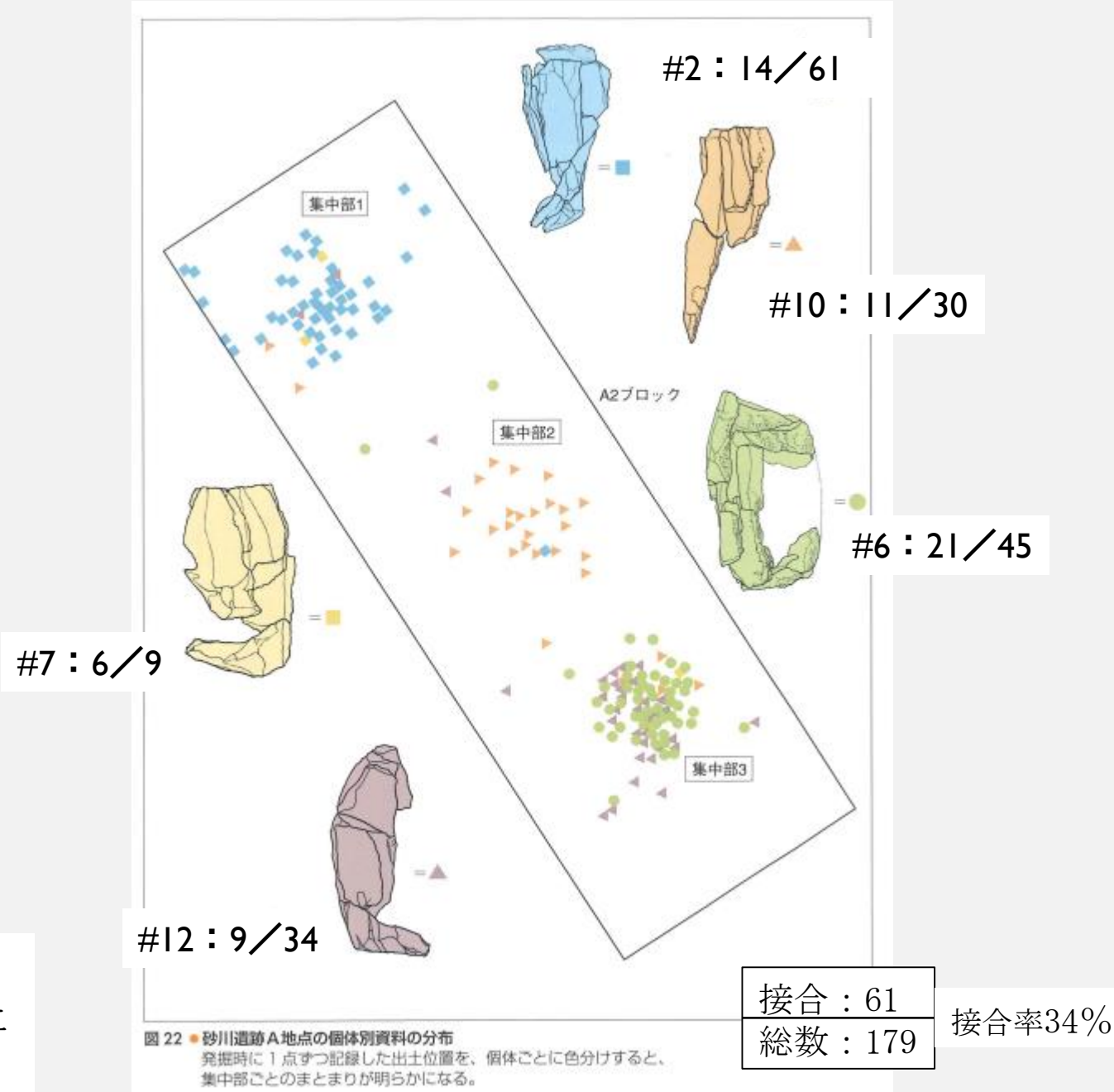
「停滞期」と「時期尚早」

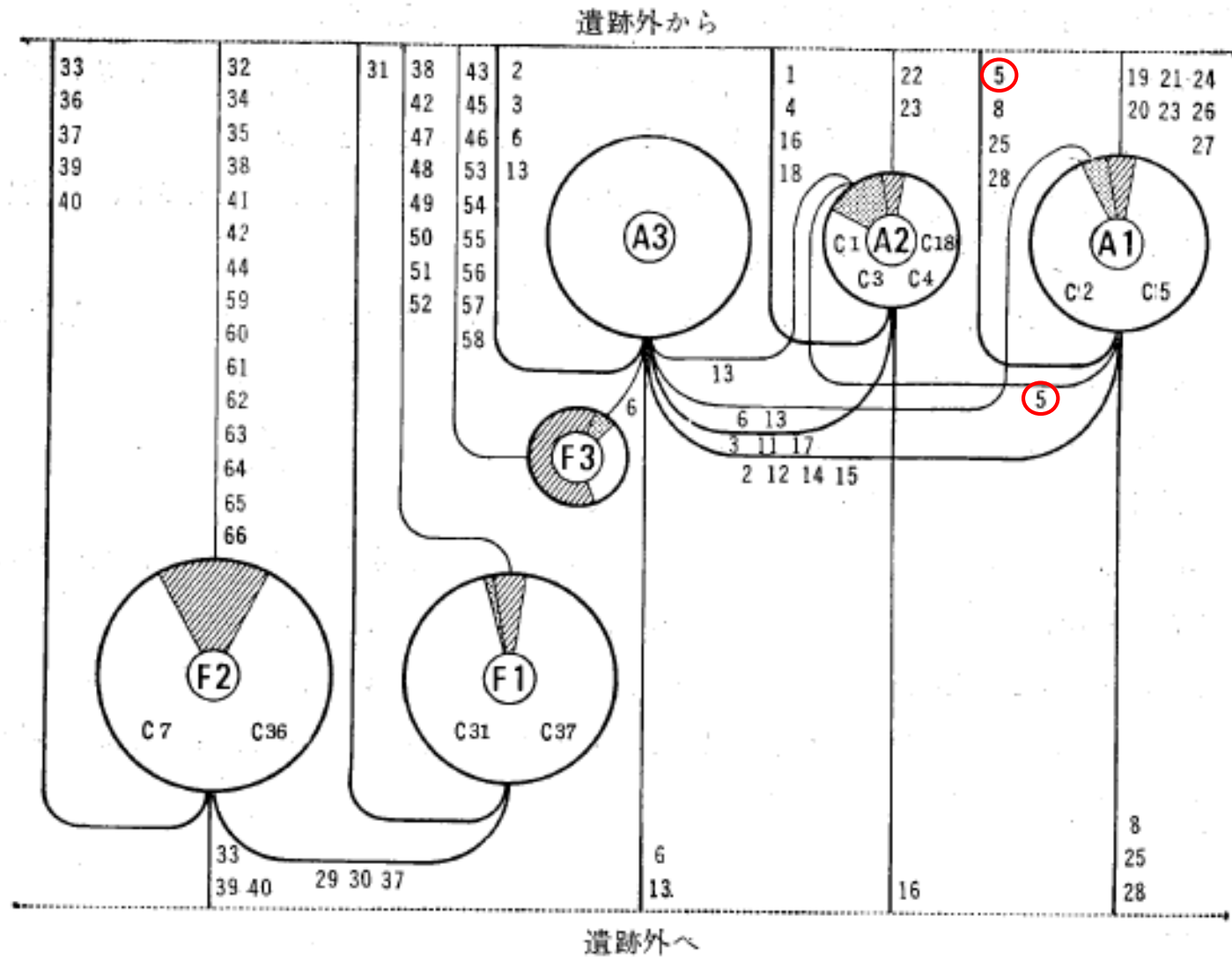
今回のシンポジウムを通してのキーワードに「停滞期」と「時期尚早」がある。いずれもシンポジウムの実行委員から発せられたものであるが、「停滞期」は瀬川氏が昭和40年代以前の当地域の研究状況に対して用いた表現であり（『集録集』「『停滞期』の評価をめぐって」）、「時期尚早」は高尾氏が現時点の資料的な欠落からシンポジウム開催の時期を尚早であるとしたものである（『集録集』「第1期の石器群をめぐって」）。

瀬川氏の「停滞期」発言とこれに対するシンポジウム席上での小野真一氏の反論は、論点のかみ合わない応酬という印象があったが、今回、集録集に掲載された2人のコメントをみて、その思いはさらに強いものとなった。それは瀬川氏が発掘調査や研究の基礎的（瀬川氏は「常識的」と表現する）方法



人の動きとモノの動きという具体的なすがたが、二万年の時を越えて、遺跡のなかからよみがえったのである！（32頁）



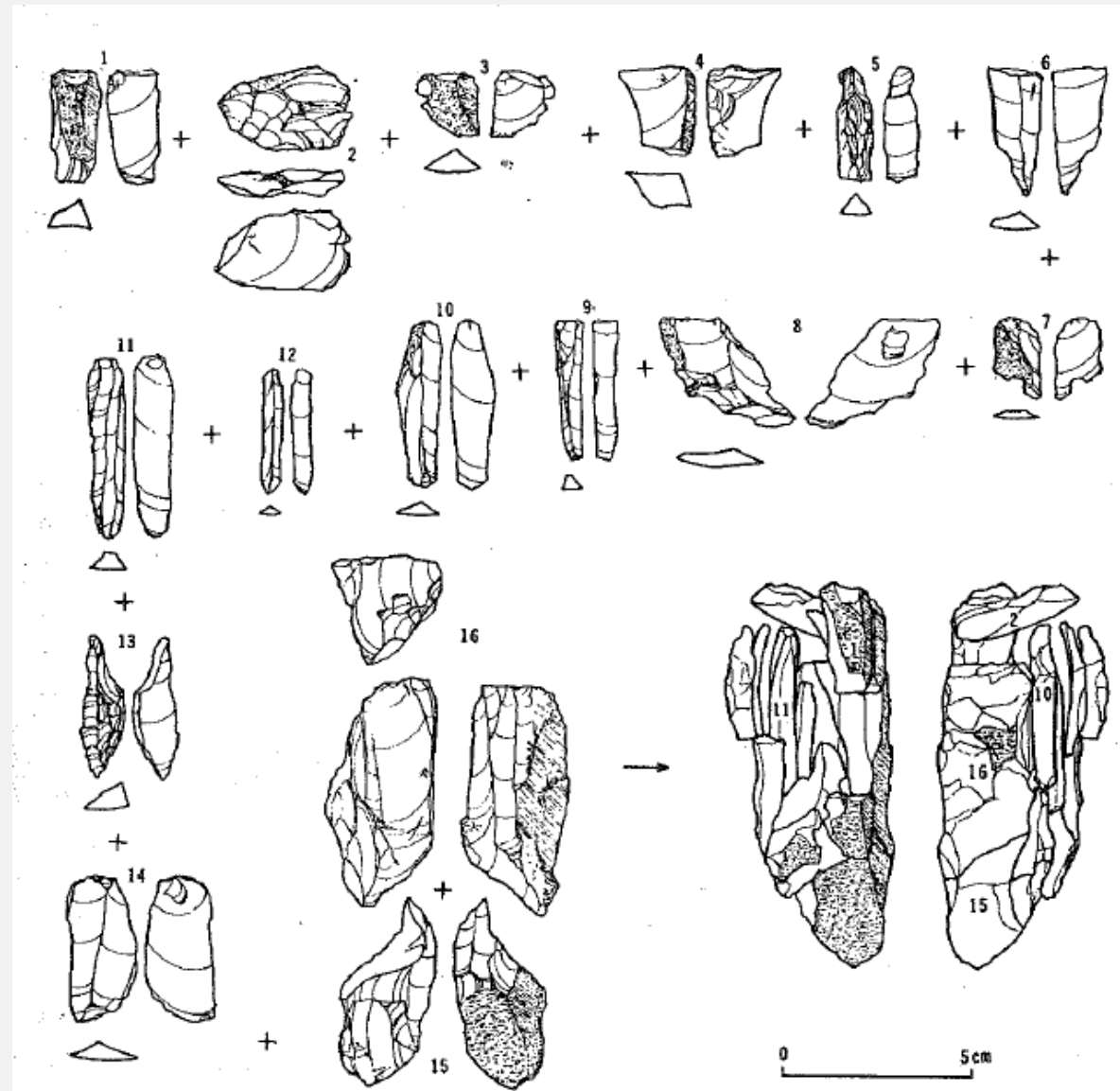


第4図 個体別資料のうごき

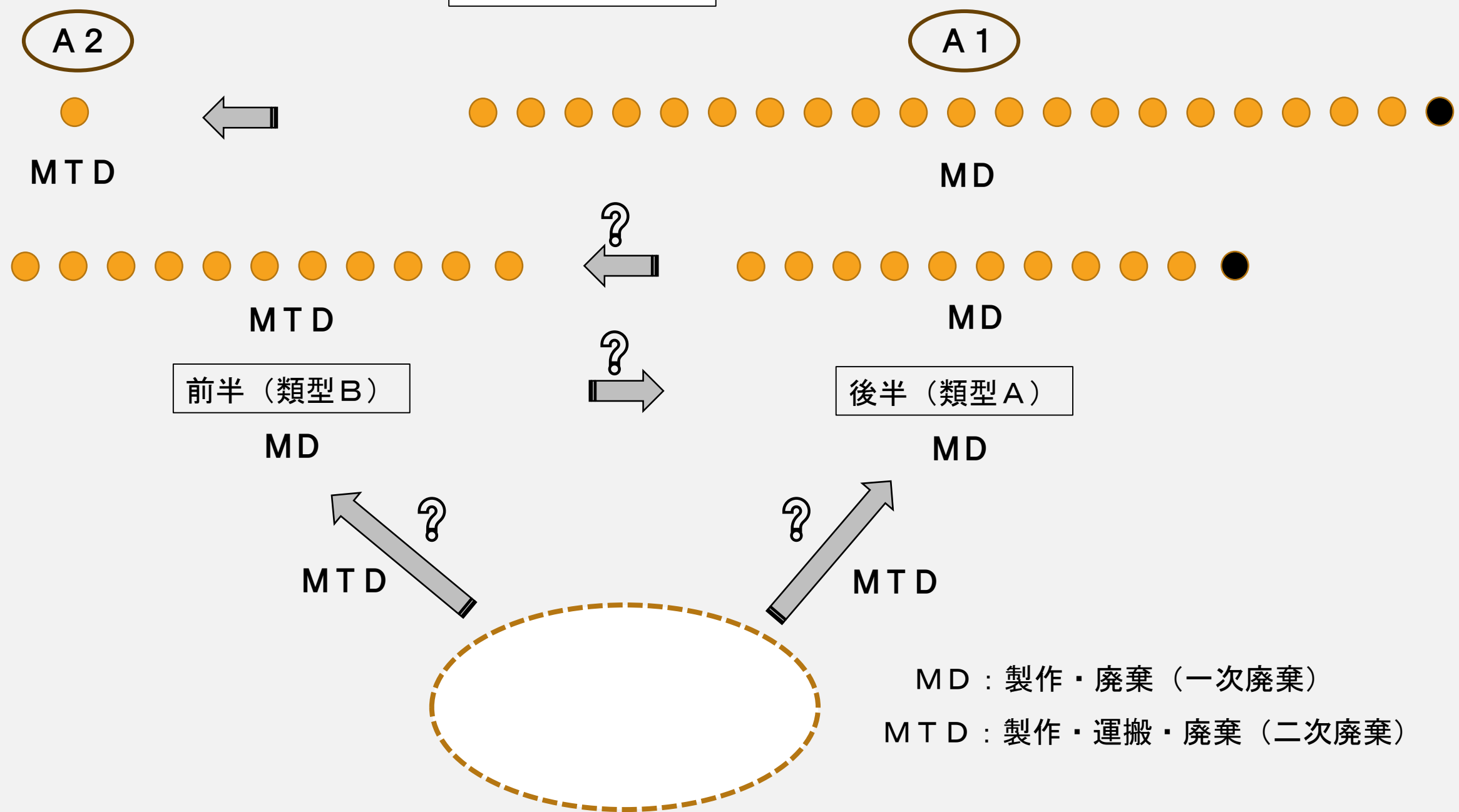
安蒜 政雄・戸沢 充則1975「砂川遺跡」『日本の旧石器文化2』:175頁



資料番号 5



資料番号 5 は遺跡外から A 1 に石核というかたちで運び込まれて石器製作作業が行われ、残核が捨てられ、製作された製品の一部分が A 2 に持ち出されていると説明されている（175頁）。



MD : 製作・廃棄 (一次廃棄)
MTD : 製作・運搬・廃棄 (二次廃棄)

【異場2枚接合】

A 地点から F 1 が出土

B 地点から F 2 が出土

F 1 と F 2 が 1 類で接合 (F1／F2)

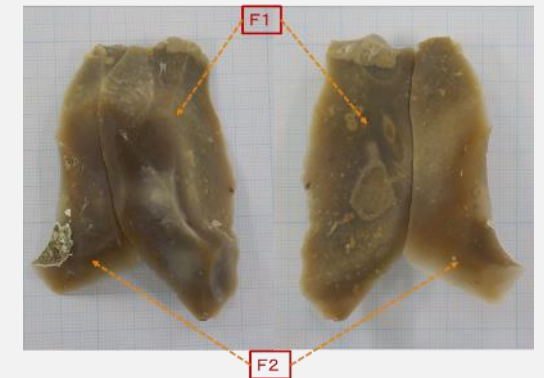
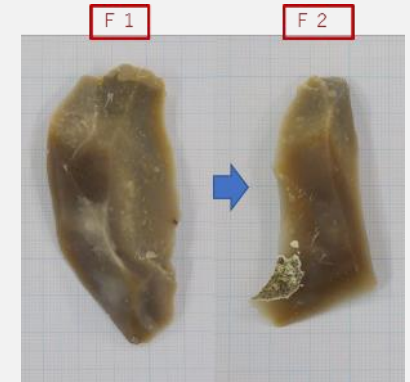
A 地点→B 地点と言えるか？

【答え】

A 地点→B 地点 : 5／10 (50%)

どちらとも言えない : 4／10 (40%)

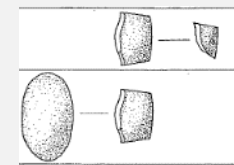
B 地点→A 地点 : 1／10 (10%)



異場 2 枚接合

- | | | |
|--------------------|------------|-----------|
| 1. MTD+MTD | (MTD重複) | [A] → [B] |
| 2. MD+MTD | (MD・MTD重複) | [A] → [B] |
| 3. MTD+MD | (MTD・MD重複) | [A] ← [B] |
| 4. MD×MD | (MD連鎖) | [A] → [B] |
| 5. MD×MTD | (MD・MTD連鎖) | [A] ? [B] |
| 6. MTD×MD | (MTD・MD連鎖) | [A] → [B] |
| 7. MTD×MTD | (MTD連鎖) | [A] → [B] |
| 8. MTD×MTD | (MTD連鎖) | [A] ? [B] |
| 9. MTD×MTD | (MTD連鎖) | [A] ? [B] |
| 10. MTD×MTD | (MTD連鎖) | [A] ? [B] |

砂川モデル



MD : 製作・廃棄 (一次廃棄)

MTD : 製作・運搬・廃棄 (二次廃棄)

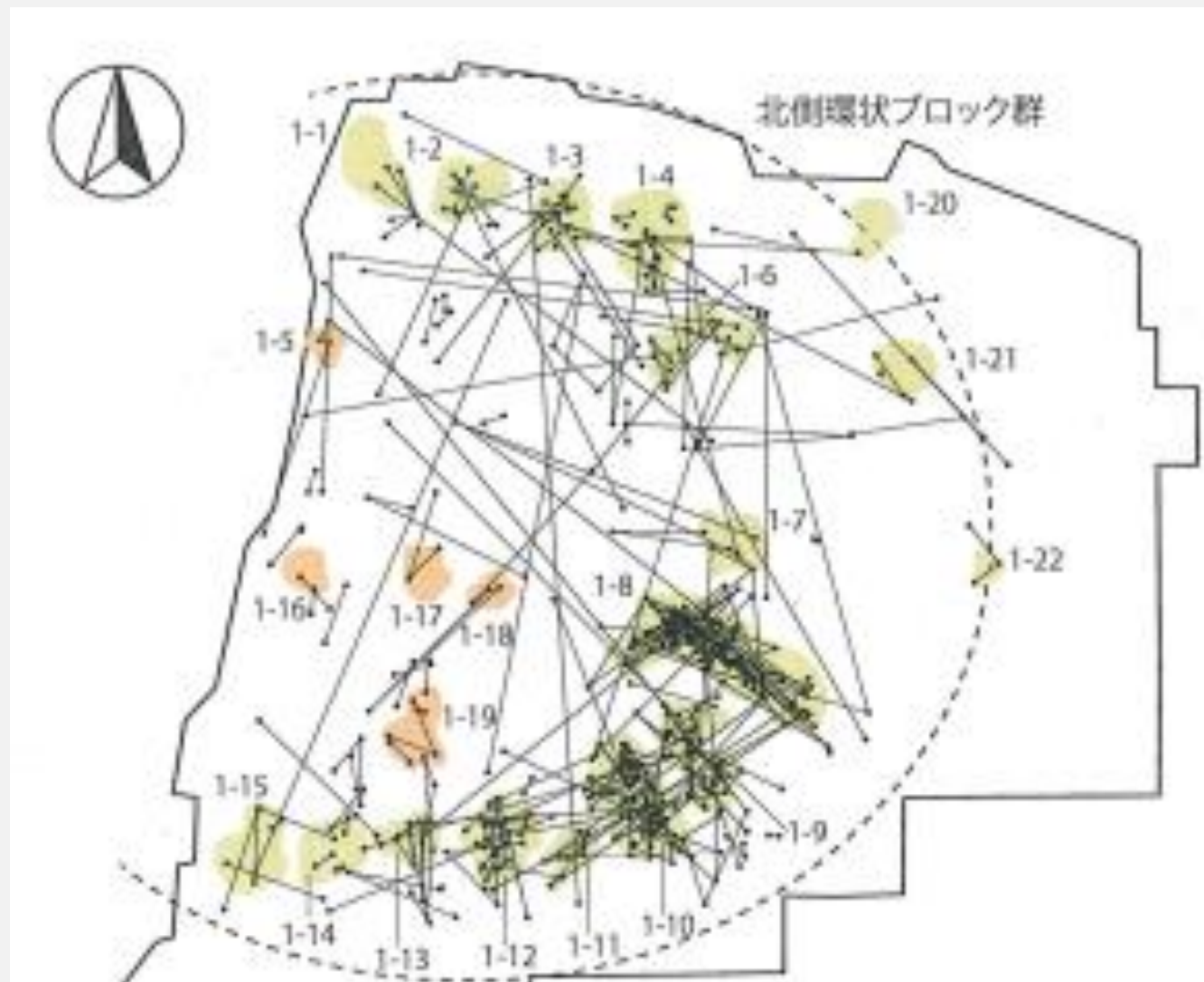
* 五十嵐2017 「接合空間論 -<場>と<もの>の認識-」 『理論考古学の実践 I 理論編』 (153-160頁) 参照

令和7年度
東久留米市教育委員会・公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター
共同事業

川岸遺跡 講演会及びシンポジウム



東久留米市教育委員会
公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター



『川岸遺跡 講演会及びシンポジウム』2026 : 30頁

前半戦ハイライト

安蒜・戸沢1975「砂川遺跡」

安蒜1990「生活空間」

岡村1979「遺棄と廃棄」

岩宿フォーラム1993「環状ブロック群 -岩宿時代の集落の実像にせまる-」

小菅、栗島、須藤

西秋1994「遺棄と廃棄」

日本旧石器学会2005「環状集落 -その機能と展開をめぐる-」

出居、谷、山口、藤野、橋本、佐藤、稲田、安蒜

佐藤2006「社会生態学」

* 小菅2006『下触牛伏遺跡』新泉社

野口2007「石器集中部」

小畑2007「旧石器時代」

* 堤2009『旧石器時代ガイドブック』新泉社

* 堤2011『列島の考古学 旧石器時代』河出書房

山岡(磨)2012「泉北側」

田村2012「ゴミ問題」

考古学ジャーナル2013「環状ユニット(ブロック群)を考える」

橋本、鹿又、津島、島立、出居、中村

小菅2014『季刊 考古学』

勅使河原2013『考古学研究法』

高屋敷2013『古代文化』

* 佐藤2019『旧石器時代』敬文社

稲田2019「歩み」

橋本2023「環状ユニット」

* 酒井2025『墨古沢遺跡』同成社

都埋文センター2026「川岸遺跡シンポジウム」

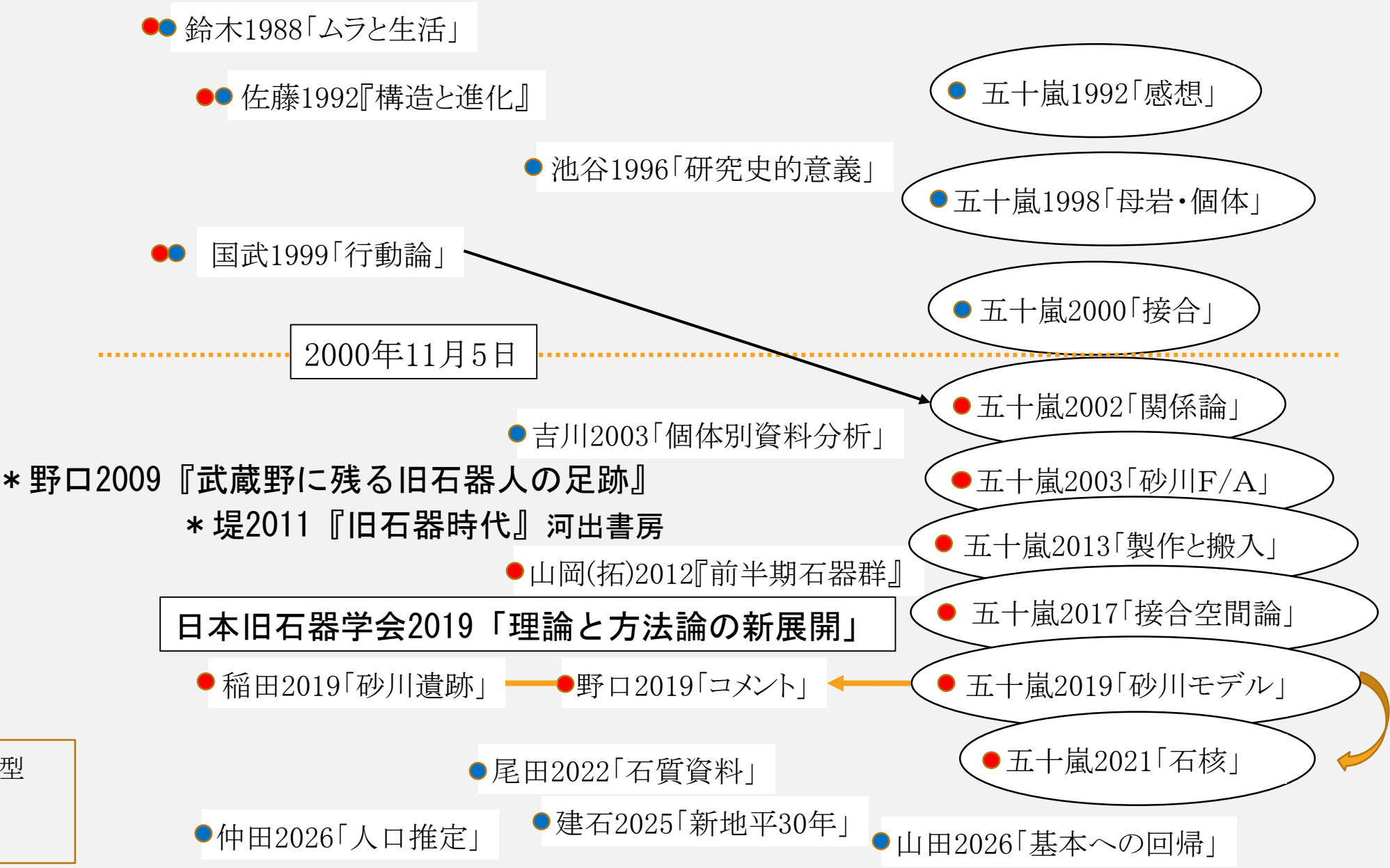
伊藤、佐藤、加藤、間、塚田、堀

竹岡2026『新しい日本考古学』

森先2026『入門 旧石器時代』

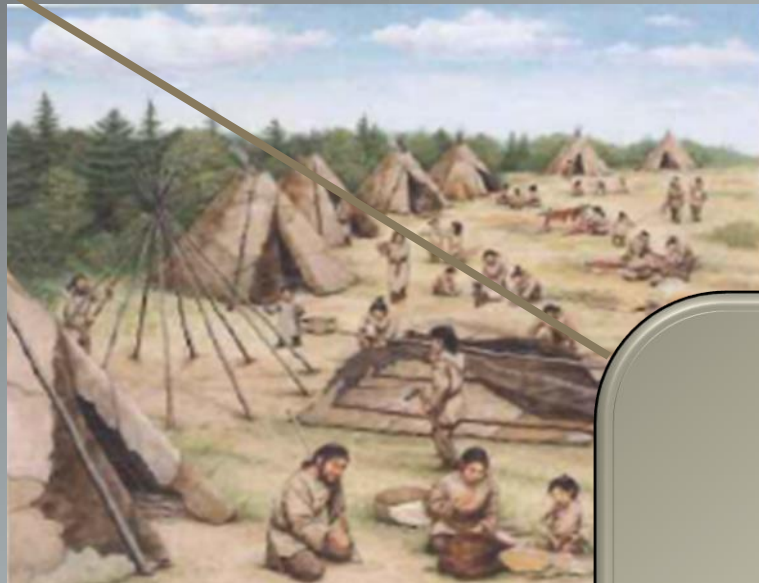


後半戦ハイライト



「遺跡構造論」の構造

月見野仮説



砂川仮説

図 3 砂川モデルの構造	類型A					
	類型B					
	類型C					

砂川モデル

母岩識別

月見野仮説の多重性

【まとめ】

- ☑ 遺物集中部を構成する資料について、製作（一次廃棄）とするか搬入（二次廃棄）とするかの判断基準が明確ではない
- ☑ 旧石器遺物集中部は、その場が住居跡（一次廃棄）とは限らない。民族事例からはゴミ捨て場（二次廃棄）の可能性が高い
- ☑ 旧石器遺物集中部を住居跡とする明確な根拠はない。縄紋住居跡の覆土出土遺物が転用遺構の出土であることに惑わされている
- ☑ 石器接合資料に基づく剥離順序は、一次廃棄の場合と同様、二次廃棄の場合はなおさら出土した集中部の形成順序を示さない
- ☑ 月見野仮説と砂川仮説は双方で「遺跡構造論」と称されているが、日本独自の発展を遂げており、世界考古学との照合が求められる

【教訓】

- …旧体制を支えてきた研究の基盤が見直されると同時に、いくつもの脆弱さが洗い出されつつある。
- …研究の成果それ自体を検証する能力をもった、これまでにない研究領域の開拓が急がれる。

安蒜 政雄2007「日本旧石器時代研究の現状と課題」
『日本考古学協会第73回総会 研究発表要旨』：11頁

異なる見解を尊重する。厳しい反対意見があっても一蹴し、さらには資料・データが共有されない場合があった。対極にある意見を尊重することは、当事者では困難な場合があり、第三者を含めて議論を構造化させる努力が求められる。

石川 日出志2007「前・中期旧石器捏造問題の反省をどう生かすか」
『日本考古学協会第73回総会 研究発表要旨』：87頁

